

石田三成の挙兵

目次

はじめに

- 1, 関ヶ原の戦い 1
 - 2, 関ヶ原の戦いへの経緯 1
 - (1) 豊臣秀吉死に際して後事を託すこと
 - (2) 石田三成の思い
 - (3) 反三成の武将たち
 - (4) 徳川家康の野望
 - (5) 反三成武将の三成襲撃と三成の引退
 - 3, 西軍・東軍の結成と両軍の動き 9
 - (1) 三成の蜂起
 - (2) 西軍の攻撃開始と東軍の結成
 - (3) 関ヶ原戦い前の両軍
 - (4) 毛利輝元の動き
 - 4, 関ヶ原の戦いと三成と家康 14
 - (1) 決戦の場
 - (2) 三成の敗戦の理由
 - (3) 三成の最期、家康の戦いの位置づけと野望達成
- おわりに一三成の出自 18

はじめに

石田三成と言えば徳川家康打倒で立ち上がり、関ヶ原の戦いで敗れ、斬首された仁で、日本人で知らない人はいないでしょう。

関ヶ原の戦いは、天下分け目の合戦と言われ、慶長5年（1600）9月15日、国内の戦いでは史上最大規模の東西両軍総計20万人規模で、美濃国（岐阜県）の関ヶ原で行われました。

石田三成は何故立ち上がったのか、何故大敗したのか、その直接の原因と背景そして三成その人を見てみたいと思います。

1, 関ヶ原の戦い

関ヶ原は濃尾平野の西北、北は伊吹山に連なる相川山、西南に松尾山、東南に南宮山で、この間の平原です。東西 7 km、南北 3 kmが戦場です。

ここに主要道中山道、北国脇往還と伊勢街道が交わります。古代は不破の関と呼ばれていました。

古代は京への関所があった場所です。

三成の軍を西軍、家康の軍を東軍と呼びます。

西側南北横一列に三成の西軍 5, 5 万人が布陣し、東側南北横一列に家康の東軍 7, 5 万人が布陣し、間 1 kmで向き合います。三成の本陣は西軍の北側（西軍から見て左翼）に位置し、一方家康は東軍の後陣に位置します。東西方向の対決です。

更に南東南宮山には西軍の 3 万が布陣し、これに対応して東軍の 1, 4 万人が家康本陣の後方で南に向かって布陣します。南北間の対決です（南宮山の対決）。

平原の中で 2 戦場での対陣となります。

関ヶ原での兵員の合計は西軍 8, 5 万人、東軍 8, 9 万人とほぼ互角です。

家康は西に、南ににらみをきかせる位置に本陣を構えます。

主要な対決は兵員の配置人数から言って東西方向での対決です。三成の位置は東西対決にしか参戦出来ません。

詳しくは後掲の岐阜県発行の関ヶ原ガイドブック「関ヶ原合戦布陣図」をご覧ください。

9 月 15 日夜明け前に先ず西軍が山の麓に陣し、続いて東軍がそれに面して 1 km離れて布陣しました。霧が晴れ始めた午前 8 時ごろに戦闘開始となりました。

終戦は同日午後 2 時半ぐらいです。

勝敗は皆さんご存知のとおり家康方の東軍の圧勝で三成方西軍の大敗北です。

敗因は簡単です。西軍の主要な戦力小早川秀秋、南宮山に布陣の吉川広家の裏切りです。その外にも西軍で裏切りが出ます。

小早川秀秋は西軍の右翼（南はし）に陣し、三成の攻撃命令に応ぜず、昼頃まで参戦しませんでした。家康の催促で予ての打ち合わせ通り西軍を裏切り、西軍を攻撃し始めました。その兵力 1,5 万人、更に西軍の 5 人の武将の 5 千人が西軍を攻撃します。

5, 5 万人の内、味方陣地から 2 万人が裏切って攻められては大敗は当たり前です。

更に南宮山に陣していた吉川広家も予て家康と通じており、南宮山を背にして東軍を攻撃せず動きません。そのためその後に陣した毛利秀元（毛利本家輝元の従弟）や更に後陣の長曾我部盛親そして東側に陣していた安国寺恵瓊、長束正家（二人は三成のシンパ）計3万の軍勢は前に進めず、まったく東軍攻撃が出来ませんでした。

明治に入ってドイツの軍事専門家は東西両軍の布陣から西軍有利と判定しました。西軍敗退の原因が西軍味方の裏切りと聞いて納得したそうです。

家康は息子秀忠の本軍3, 5万人が西上の途中上田城（真田唱幸）で城を落とせず関ヶ原の戦いに間に合いませんでしたが、家康は決戦に踏み切りました。

この裏切りを信じてのことです。

家康はこの勝利で徳川家政権樹立の道に進みます。勝った後は豊臣家（秀吉の子秀頼）の大老の位置でしたが、3年後には後征夷大將軍に就任し徳川政権を樹立し、元和元年（1615）には豊臣家を滅亡させます。（大阪の陣、秀頼自刃）

2, 関ヶ原の戦いへの経緯

(1) 豊臣秀吉、死に際して後事を託すこと

それでは何故この大合戦になって行ったのかその経緯をみて戦国時代終末のドラマを見てみましょう。

天下人豊臣秀吉が関ヶ原の戦いの2年前の慶長3年（1598）8月に死没します。

死を予期した秀吉は何とか自分の天下を我が幼子6歳の秀頼に譲り、豊臣政権が存続するように画策します。

そのために自分の死後の政権運営のために五大老・五奉行制を取り入れます。五大老が政策決定をして、五奉行がそれを執行する役割ですが、五大老と五奉行は豊臣家と政権の安泰を相互に監視し合う立場にもします。

五大老には大型大名の次の5人の大名を任命します。

徳川家康：（58歳、関東で256万石）、織田信長の同盟の相手で秀吉とは互いに後継を競った間でしたが、和議で家臣にしました。尚、豊臣直轄領が220万石でこれを上回りますが、豊臣家は全国の金山、銀山のほとんどはわが物ですので財政規模は豊臣家が圧倒的に大きいと言えます。

前田利家：(62歳、加賀で83万石)、信長の下で秀吉とは元同僚で付き合いは長く信頼関係にありました。

毛利輝元：(46歳、中国地方で112万石)、信長時代に争い、信長が明智光秀の謀反で倒れた後、和議を結び、その後秀吉の家臣になりました。

上杉景勝：(45歳、会津で120万石)、謙信の養子です。信長没後降参して秀吉の家臣になりました。

宇喜多秀家：(27歳、備前岡山で57万石)、宇喜多秀家は父親の直家が信長時代から秀吉と手を結びその後家臣となり、秀家は親の直家が秀吉に仕えて2代目です。

家康を伏見城で政治に関する筆頭責任者、利家を大阪城で秀頼の守役に決めました。秀吉は家康の孫娘を(秀忠の娘)を秀頼の嫁に決めていました。

自分の死後、豊臣政権の存続を家康へ託していました。

五奉行には秀吉の側近で執政に手慣れた次の5人を任命しました。

浅野長政：(52歳、甲斐府中で21, 5万石)、秀吉の正妻ねねの養家で、ねねの義理の兄なります。

^{ました}増田長盛：(54歳、大和郡山で20万石)、小姓からの抜擢で近習、奏者番(大名と秀吉との取次役)になりました。

石田三成：(39歳、近江佐和山で19万石)小姓からの抜擢近習、奏者番になりました。

^{なつか}長束正家：(51歳、近江水口で12万石)、亡き信長の家臣丹羽長秀の書記官を近習にしました。

前田玄以：(60歳、丹波亀山で5万石)、信長の亡き後信長の書記官を近習にしました

五大老は大大名ですが、みな秀吉が屈服させた外様の大名です。宇喜多秀家は父親が臣下になった大名です。

五奉行も秀吉には累代の譜代の大名でなく、彼がスカウトした人材です。秀吉のおかげで一代で大名になった人たちです。

五大老の大名はみな武将ですが、五奉行は戦にも出ますが、主な仕事は秀吉のそばでその指示に基づく書記官、執政官です。

秀吉没時、秀吉が頼りにしていた弟の秀長は既に没しており、その子に男子はおらず、身内に幼子秀頼を託す有力大名はいませんでした。

戦国時代に自分が死に臨み、後継の我が子が幼い場合、その家の累代の有力譜代家臣の一人に守役、後見役頼みます。

それでもお家の存続は危機に瀕します。

秀吉もこのことは充分分かっています。

自分だって信長の後を後継の秀信（三法師、信長の孫、嫡男信忠の子）に渡さず政権をわが手中にしたのですから。

「外様の大大名だけにまかせるには心配であるし、自分の腹心の五奉行だけでは他の大名を取り仕切る力がない。」

考えた末に五大老、五奉行制を死の間際に作り、秀頼を頼む、頼むと泣きながら何度もこの10人に起請文を書かせて亡くなりました。

慶長3年（1598）8月に病没します。

その2年後に関ヶ原の戦いです。

しかし秀吉が一番よく知っていた通り戦国の世は無情です。大名たちに恩を売ったつもりでも本人が亡くなれば自分の力で今の地位があると考えます。

まして豊臣家とは一代秀吉だけの主従関係でした。

（2）石田三成の思い

しかし三成は違います。ひたすら命をかけて秀頼を守って豊臣家につくす考えです。

三成はひたすら秀吉の手足とし仕えて、その能吏を最大に評価された人です。武士ですから戦場に出されますが、武将としての手柄はほとんどなくむしろ失敗します。

秀吉の小田原城攻めの時、その支城の忍城^{おしじょう}を落とす命令を三成は大将

とし命じられ水攻めを行いますが、結局落とせませんでした。これは攻城の失敗です。

それでもお咎めありません。文官的な家臣と言えます。

彼の仕事は、豊臣家の財政（直轄地）、検地、刀狩り、法整備、戦場への物資の調達、運搬、そして奏者番として秀吉と大名間の取次です。これは重要で、各大名は奏者番を通さないと秀吉と意志疎通が図れません。

この仕事は秀吉は他の奉行にもやらせませんが、三成の執政が一番に評価され、他の奉行も彼の手腕を認めていました。

しかしすべての政策、事業は秀吉一人が考え、それを秀吉の指令で三成や奉行は実行するのです。

従って秀吉の政権下で三成が考えだした歴史的な政策はありません（検地も刀狩りも三成の案ではありません）

三成は間違いなく秀才の能吏です。自分がここまでこれたのは偏に秀吉のおかげと思い、秀吉の死後命をかけて豊臣家につくすつもりだったと思われる。

（3）反三成の武将たち

ところが三成の性質からくるものでしょう。関係者から大変受けの良い人と極めて悪い人に分かれます。

先ず受けの良い人です。

大老の上杉景勝、同じく大老の毛利輝元、大大名の島津義弘(薩摩)、佐竹佐義宣（常陸）、長曾我部盛親（土佐）。この人たちは秀吉に屈服して家臣になって以来、奏者番三成の世話になり、三成の実力を評価した大名たちです。

外に五奉行の仲間たちです。前田玄以、増田長盛、長束正家は家康と三成の間では日和見的でしたが、表向きは三成と友好関係にありました。

関ヶ原の戦いの後の家康の判定は長束は首謀者の一人（自刃、晒し首）とされ、増田は共犯（領地没収）、前田は中立（お咎めなし）となりました。

五奉行の一人浅野長政は早くから三成と反りが合わず関ヶ原では家康側に立ちました。

その外仲の良い武将小西行長がいますが、この人は武将でもありますが、三成と同じく能吏、文官で三成と気が合ったのでしょう。小西は加藤清正など、三成と反りがあわない武将と同じく仲が悪かったようです。

そして三成の正義感、潔癖感とその引かない自己主張から交友関係でどうしても反りが合わない決定的な敵対関係の人を作りました。

加藤清正、福島正則、加藤嘉明で幼少の頃からの秀吉の子飼いの武将(大名)ですが反りがあいません。

外に信長から秀吉の臣下に移った池田輝政、藤堂高虎、細川藤孝・忠興親子、山内一豊、蜂須賀家政等の武将たちもです。

この大名たちは朝鮮に出征した大名たちです。

秀吉は朝鮮出兵では現地での総大将の権限があやふやでした。もちろん総括的な決定は秀吉が九州の名護屋や大坂で行うのですが、個別の作戦、遂行は現地で主要な武将たちの多数決で決めていたのです。もめます。特に加藤清正と小西行長の間でもめます。

ここに秀吉の指令を伝え、作戦の実行を検証する軍監(目付)が秀吉から派遣されます。

この軍監に三成や三成の息のかかった武将が派遣されてやって来ます。

この軍監の報告で蜂須賀家政、黒田長政、加藤清正是命令違反で秀吉から逼塞となります。

清正らは虚偽の報告として訴えますが、秀吉には聞いてもらえません。

三成のなせる業として深く恨みます。

秀吉死没をもって終戦となりました。

朝鮮出役のすべての大名の恨みがあったわけではありませんが、戦線が思わしくない中で、三成は軍監として多くの出役大名に恨みを買いました。

秀吉没後家康の再裁定で虚偽の報告として三人は無罪が裁決されました。三成の息のかかった軍監は領地没収の処分を受けました。

三人は元より朝鮮に出役していた武将の多くが家康の裁決を歓迎しました。

(4) 徳川家康の野望

秀吉が没します(慶長3年=1598年8月)と家康は直ぐに政権を我がものにしようと勢力拡大に動きます。

大名間の勝手な婚姻を禁ずる誓約に家康は違反します。徳川家の息子や娘と伊達政宗の娘、福島正則の息子、蜂須賀家政の息子、加藤清正の息子との間で婚約をします。

これが発覚し外の4大老、5奉行が違約をせまり、トラブルとなります。

前田利家が生きておりましたので何とか収まりまし。
利家は翌月の慶長4年（1599）3月に病没します。

家康の動きは政権乗っ取り目論んでいると見る大名もいます。
いやそうではない筆頭大老としての活動と見る大名もいます。

上記のように徳川家康が256万石で次に上杉景勝の120万石、毛利輝元112万石と家康がと圧倒的な勢力です（豊臣家の領地が220万石でした）。

この物語の主人公石田三成は19万石の大名でありながら豊臣家の政権の持続と秀頼の安泰を純粋に考えていたに違いありません。

ここで領地と兵員の動員力の関係を見ておきます。

領地1万石で何人の兵が動員出来たかですが、朝鮮出征の時の秀吉の動員命令から見て500人と見ましよう（秀吉は九州の大名で600人、関東以北の大名は200人と九州と遠国の大名では差をつけています）。

これによりますと家康は12,8万人、上杉景勝は6万人、毛利輝元は5,6万人となります。

ただし自分の城の守りのための兵を残す必要がありますので全部を戦場に向かわせることにはなりません。

家康は、関ヶ原の戦いの時に関ヶ原には家康軍3万人、間に合いませんでしたが息子秀忠軍3,5万人、上杉軍への対抗のため息子結城秀康軍の3,5万人、残りの2,8万人は江戸城の守備と対佐竹氏への抑えのため兵でしょう。

豊臣家の直轄地から何人兵を動員出来たか不明です。直轄地は秀吉が大名に支配を委託していました。動員出来る兵はほとんどその大名の家来になっていたと言われ、秀吉やその後の秀頼の直轄軍は小さく護衛兵や守備兵位であったのではないかとされています。徳川將軍家のような強力な直轄軍（旗本、御家人）がなかったのです。

（5）反三成武将の三成襲撃と三成の引退

政局は家康方と三成方に形成されつつあります。

家康方には朝鮮出役で、三成の秀吉へ中傷の報告に、怒りを持ち続けている大名が集まります。その外は秀吉没後の家康の圧倒的な政治力の流れに入ってしまった大名たちです。

三成方は家康政権樹立に反対の勢力です

五大老の毛利元就、上杉景勝、宇喜多秀家、前田利長（利家の息子）、外の有力大名では佐竹義宣、島津義弘、長曾我部盛親、小西行長それに浅野長政以外の五奉行では増田正盛、長束正家、前田玄以、その外秀吉に恩義あり三成にこれまでに世話になった大名たちでしょう。

但し、毛利も宇喜多も前田も家康には逆らえない情勢になって来ています。

この情勢の中で、朝鮮出役で三成に不満を持っていた三成と犬猿のいわゆる武闘派の七将と言われる大名加藤清正、黒田長政、細川忠興、池田輝政、加藤嘉明、福島正則、浅野幸長によって三成を襲撃が計画されたのです。武闘派の彼らは三成への我慢の限界に来たのでしょう。

慶長4年（1599）閏3月のことです。

前田利家は同月に没してからです。彼らを止られる人はいません。

三成は計画を察知して、大坂の自邸から宇喜多秀家邸、そして伏見の自邸に逃げます。

そこで家康が仲裁に入り、引退を勧告されます。家康は息子の結城秀康に護衛させて瀬田まで送ります。三成は居城の佐和山（滋賀県彦根の山手）に帰ります。

反家康の急先鋒の三成は家康に助けられて佐和山城に逃げ帰ることが出来ました。

ここで何故反家康の三成を逃したのかが言われます。ここで加藤清正等に殺させておけばその後の合戦はなく安全に政権を取れたのにと。

そうしたならば政権を我がものにしても、それは豊臣家の大老、家臣としての立場のままになります。

家康の徳川家政権樹立の方策な何か。後述します。

前田利家の死、三成の引退で、反家康の求心力を無くした五大老の毛利輝元、上杉景勝、前田利長、宇喜多秀家は家康と互いに誓紙を交換して国元に帰ってしまいます。

家康だけがとどまります（伏見）。

秀吉の遺言（秀頼の擁護と豊臣政権の存続）を執行するには五大老は、伏見、大坂にいないと出来ません。

前田利長は親の利家を引き継いで本来は秀頼の守役として大坂城に勤務しなければならない立場です。

もう家康の独壇場を許す位置に下がりました。

3、西軍・東軍の結成と両軍の動き

(1) 三成の蜂起

家康は慶長4年(1599)9月には大坂城に入り、豊臣政権の全権を握ります。五奉行も家康の傘下です(三成は引退ですので4人)。

次に大老も家康の傘下に置く工作をします。

まず利家が没した後の前田家です。跡取りの利長の命令で家康襲撃の計画があるとして、加賀にいる利長打倒を宣言します。

ただの噂でしょう。家康側の誰かがでっち上げたのかもしれませんが。

利長は否定し、母親を人質に出して和を乞い、服従を約束します(1600年5月)。

次の標的は会津の上杉景勝です。

景勝に謀反の動きがあるとのうわさがあることから上洛を求めますが、景勝は拒否します。前田利長と違い、家康に抵抗を示したのです。

家康は上杉征伐を決めます。ただこれは他の大老の毛利、小早川、前田宇喜多そして三成以外の4奉行も同意しています。まあ家康に反対できない情勢だったのでしょう。

慶長5年(1600)6月18日に伏見を家康の軍勢は出発します。この軍勢の中には反三成の武将たちがいます。

家康が出発して半月ほどして7月の初めに三成は打倒家康の計画を実行します。家康が江戸に到着(7月2日)する頃で、未だ会津に向かう前です。

三成は先ず親友の大名大谷吉継と予て親しい毛利輝元の参謀の安国寺

恵瓊えけいに打倒家康を説得します。

大谷吉継は当初は計画が無謀として反対だったのですが、三成の熱意にほだされ計画に乗ります。

吉継自体は5万石の大名でさしたる戦力は持っていません。

計画に安国寺恵瓊が積極的に乗って来ました。この人は元は坊主で、毛利家に仕え、当主輝元の信頼を得ていました。

輝元は安国寺恵瓊の説得に応じてしまいます。従弟の吉川広家は反対でしたが、もう決定だとして押し切られました。

輝元は元就の孫で毛利本家の当主になりましたが、叔父の吉川元春や小

早川隆景が生きている間は二人にリードされていましたが、二人が亡くなってからは安国寺恵瓊の影響が強くなり、引っぱられるようになりました。

家康は上杉征伐で伏見、大坂を留守にする間に、三成が反家康軍団を結成して決戦に挑んでくるのを待っていました。その前段階で三成を加藤清正らに殺させてはならないと思い、清正等に襲撃される三成を逃したのです。

戦場での決戦に勝てば豊臣政権から徳川政権に一举に移行が出来ると判断したのです。

とにもかくにも石田三成の西軍結成にはこの毛利輝元が大将としてそしてその一家が参軍したことが大きいのです。

その他の大名は三成への恩義があったかも知れませんが、勝てるかもしれないと思ったのは毛利輝元が総大将になったからでしょう。

宇喜多秀家は毛利の参軍のこともあったでしょうが、家康横暴で反家康に立ったのでしょう。宇喜多家で秀家と家来とのお家騒動の決着で家康の裁定が気に入らなかったと言われています。

その他の西軍への参軍の小西行長は予てよりの三成との信頼関係から、又島津義弘の毛利参軍は三成との親交からでしょう。島津氏は1500人の軍勢しか出さず、国元に1万の主力を残しています。西軍につきながら西軍敗戦もにらんでいたのでしょう。

その他の大名は毛利の西軍への参軍によることが最大動機でしょう。

小早川秀秋は西軍に入りました。30万石の大名で軍勢1,5万人です。

東西を見比べてからか、伯母さんのねね（秀吉正妻）からの言辞からでしょうが途中から東軍に変わりました。親しい黒田長政の説得もありました。

（関ヶ原の戦場で裏切って東軍に味方します。これが西軍大敗の決定的な要因となります）。

五奉行うち浅野長政は以前から家康側の東軍ですが、残る3人は三成の大坂城再登城で簡単に三成味方を表明します。

しかしその後前田玄以は中立となり、増田長盛は西だか東だか分からない行動に出ます。長束正家は西軍として関ヶ原に出ます。

家康はこの三成の動きを江戸へ着く前に吉川広家や増田長盛からの7月12日付の密書で知りました。

広家は家康へ内通です。「やむを得ず本家の輝元に合わせて西軍に入りま

したが、家康殿の味方になる」と7月14日付で書状を送りました。
増田は内通しましたが、最後までどちらに味方なのか分かりません。

三成の西軍の宣戦布告は家康への13箇条の弾劾状が出された7月17日と言えるでしょう。
要するに家康の独断専行を糾弾した内容です。

(2) 西軍の攻撃開始と東軍の結成

総大将は毛利輝元、副大将は宇喜多秀家、参謀は石田三成という形になりますが、実際の作戦、遂行は三成になります。

二人は三成より大きい大名で引き連れて来る軍勢も大きいので、絶対的な指揮権は輝元にあるのが本来普通です。

しかし今回の打倒家康の旗振り、計画は三成にあり2人は賛同した立場にあります。

作戦遂行は三成に従わざるを得ません。しかし三成の指令に完全には服しません。

大軍を現場で指揮した経験に乏しく、武将としての力量に問題ありとされている三成はこの後いくつも失敗します。

先ず大坂に在住の大名の妻、子を入質にとりますが、何家にも逃げられ、細川忠興夫人のガラシャは自殺されます。ここで外の入質には手荒なことは出来なくなります。

先ず、家康の留守部隊が守っている伏見城を攻めます。留守部隊は降参せず、激戦の末に8月1日落城します。守将鳥居元忠の最期は有名で武士の鏡と世に称賛されます。三成も褒めざるを得ませんでした。

それから細川忠興が出征中で留守を守っている父親の藤孝(幽斎)の丹後の田辺城を攻めます。守備の500人に対し1万5千の兵で開城させるのに9月3日までかかります。(9月5日が関ヶ原の戦いの日)

攻める必要がない城です。ほっとけば良いのです。兵が無駄です。

一方家康は7月21日に会津向け江戸を出発します。もう三成の蜂起は知っていました。

下野(栃木県)小山で上杉征伐軍の豊臣諸将と会談します。7月24日です。

三成蜂起はもう遠征中の豊臣の諸将も知っていました。

福島正則、池田輝政、黒田長政、浅野幸長、加藤義明、藤堂高虎、田中吉政、山内一豊等です。

家康から三成が兵を挙げたことを告げ、自分は三成一党と戦うが一緒に戦う人は残って欲しい。三成に味方する人はどうぞ帰って下さいと。

福島正則は諸将の前で「もし家康殿に真に太閤の遺命に奉じて秀頼様を輔佐する意向があるなら、自分は先鋒となって三成一党を撃破する」と演説します。

これにより真田昌幸以外の大名はみな家康方につくこととなります。

東軍の結成です。

家康は上杉の南下を抑えるために、息子秀康を配置（3、5万人）につけ、伊達政宗や最上氏の上杉攻撃の同意を確認し江戸に戻ります。

東軍の諸将は直ぐに大坂への西上を開始します。

（3）関ヶ原の戦い前の両軍

伏見城の徳川留守部隊を落とした後、三成は軍を伊勢方面、美濃方面、北国口方面に分けます。（外に大阪城留守部隊と丹後田辺城攻撃軍）

三成は決戦場を尾張と三河の中間地帯と想定しました。軍のすべてはこの地点に集結させる予定でした。

伊勢方面には宇喜多秀家、毛利秀元、吉川広家、長曾我部盛親等の西軍の主力が出撃します。この方面は桑名から大津への抜ける東海道がある事と共に、東軍の大名の城がいくつかあったことからです。この城をたたく必要を感じたのです。

北国街道口は加賀の前田からの侵攻を防ぐためです。

結局主戦場になった美濃には当初石田三成、小西行長と岐阜城主の織田秀信が配置につきました。秀信は幼名吉法師、信忠の子で信長の孫です。

織田家の正嫡、跡取りです。秀吉に擁護され成長しました。

ここですでに間違いがあります。

伊勢方面の東軍方の城は大きくなく勢力も小さいのです。ほっとけば良いのです。東軍が東海道を攻めて来ると思えば滋賀の大津に軍を集結すれば良いのです。

想定した尾張と三河の間で戦うならここに軍を留める必要はありません。

早くその地点に主力軍を向かわせればよいのです。

東軍は8月14日すでに尾張（愛知県）の清須城（福島正則の居城）に

集結しています。未だ江戸を発していない家康の命令で23日岐阜城を落としました。

東軍が伊勢から大津に向かう東海道ではなく尾張、美濃方面へ向かうことは8月10日以前に三成は分かっています。三成は岐阜城（城主は西軍に入った織田秀信）を守るために10日には大垣城に入っています。

岐阜城は三成が本陣を構えた大垣城の北側20KMに位置し西軍の大垣城と並ぶ重要拠点です。三成は守れませんでした。

何故岐阜城を守るために伊勢方面の主力軍を美濃へ移動させなかったのか。直ぐに移動させれば岐阜城攻防戦に間に合ったはずですが。攻防戦の13日以上前に東軍の尾張、美濃方面への進軍は分かっていたはずですが。

西軍の美濃の大垣城集結は9月初めになります。

そもそもほとんど意味がない伊勢方面へ主力軍をはりつけ、主戦場になる美濃への軍の集結が遅れました。

伊勢方面へ主力軍を回すことは誰が決めたのか、又伊勢からの移動が遅いのは何故かここら辺は三成の指揮に原因があるのか、大将を毛利輝元、副大将を宇喜多秀家を仰ぎ、指揮の統一が出来ていない西軍の内部事情にあったのか分かりません。

(4) 毛利輝元の動き

家康は徳川軍3万をもって9月1日に江戸を出発し、13日には美濃の岐阜城と大垣城の間に本陣を設け、西軍集結の大垣城に向かい西軍と対しました。

息子秀忠軍3,5万が中山道から到着前ですが、戦いを決めていました。さてここです。

西軍の総大将毛利輝元が前線の美濃に何故やって来ないかです。三成は出陣を要請しました。輝元は手勢3万を擁して大坂城にいました。

輝元は五奉行の一人増田長盛が家康に内通している疑いがあるとして出陣できないと。これは言い逃れでしょう。

これは、輝元はその後吉川広家の意見を取り入れて家康と戦わないことにしたのです。

広家を通じて家康から出陣しなければ本領安堵の約束を言われていたのです。

輝元は以前から家康にはかなわない、政権は家康のものになると思っていました。だから家康に起請文を書いて国元に帰ったのです。

安国寺恵瓊にそそのかされて立ち上がってしまったのを後悔していました。

しかし当初は東軍の結成は無理、結成しても家康は上杉への対抗上出陣してこない。乱戦の中で終戦で、大坂と関東の対立の政権運営で自分は秀頼を頂き豊臣政権を握る構図を考えていたと思います。

家康の出馬は輝元、三成にとってもそして西軍の諸将皆大変脅威でした。三成も輝元も家康の出馬がないと踏んでいました。

三成は家康に宣戦布告をしてしまったのです。もう引けません。

4、関ヶ原の戦いと三成と家康

(1) 決戦の場

家康が西軍の拠点大垣城の対面に陣していたのですが、東軍が関ヶ原經由三成の居城の佐和山城に向かうとの情報を流しました。京へのルートです。

うその情報を東軍が流したのでしょうか。

家康は関ヶ原での決戦を求めたのです。

三成は手薄な佐和山城を落とされてはと考へ、これを阻止するために全軍を大垣城から西方の関ヶ原に移動させ、関ヶ原の西側に西軍の本陣をしき東軍を迎え撃つことにし、大垣城に集結の大名に急ぎ通達しました。

輝元がせめて佐和山城まで出陣してくれていたら三成は関ヶ原での戦いを家康に挑まなかったでしょう。

家康は関ヶ原を進んで近江の佐和山經由京への作戦は立てられません。

前に毛利軍、後ろに宇喜多、光秀軍となります。

中山道からの秀忠軍（3，5万）の到着がないまま進軍の作戦は立てられないでしょう。

秀忠は中山道を西上の途中での真田昌幸の信州上田城を落とせず、時間を浪費してしまい関ヶ原の戦いに間に合いませんでした。

力づくで落とせなかったのが原因と言われますが別の説があります。

昌幸より講和を申し入れがあり、その交渉に日にちがかかってしまいました。昌幸は策士です。講和するつもりはないのに秀忠軍を進軍させないために時間稼ぎをしたのです。

最大の兵（1，7万人）を持つ宇喜多秀家は関ヶ原に行く前に先ず大垣城前面の東軍に攻撃を加え、ダメツジを与えることが必要と主張します。提案は却下されます。

小早川秀秋（1，5万人）は裏切りを決めており、早々と関ヶ原の西側

の南の端に陣をしいて動きません。裏切るための好位置です。

家康に内通している吉川広家は毛利秀元（輝元の元養子）と共に関ヶ原の東南のはずれ南宮山に陣取ります。二人は東軍を攻撃せず戦いに参戦しませんでした。秀元は広家の指示によるものです。

家康の出陣が分かり、当初西軍に加わった大名たち（近畿地方と九州の大名が多い）は、西軍の敗戦を予想しました。

彼らは妻子を人質に取られて西軍に加わった人が多いのです。

細川忠興の妻のガラシャの自殺で三成は人質の自殺を懸念して、東軍の諸将の妻子を殺せません。

徳川軍そのもの兵力が大きいこともさることながら、秀吉亡き後「合戦での采配は家康が抜きんじている、特に野戦では」と言われていました。その中で小早川や吉川以外にも家康に内通して西軍を裏切る者が出てきます。

大津は東海道と北陸・中山道交わる京・大阪への要所です。ここに大津城があり、城主は京極高次です。当初は西軍でしたが、関ヶ原の戦いの十日ほど前に東軍に寝返り籠城します。西軍が落城させたのが15日の関ヶ原の戦の日で、そのため軍勢（1万）を関ヶ原に回せませんでした。

吉川広家は家康にかなわないと当初から感じ、本家の毛利輝元に意見しましたが、輝元は安国寺恵瓊にそそのかされて西軍の総大将に祭り上げられました。

しかしその後、家康に内通していた吉川広家に説得され、大阪城から動かず、総大将の役割を果たしませんでした。

小早川秀家は伏見城の攻撃に加わったものの家康出陣が分かり、家康に寝返ったのです。黒田長政の説得によるものと言われています。

関ヶ原で右翼（南側）に陣を構えていた赤座、小川、朽木、脇坂の諸将も家康に寝返りました。

三成は小早川については怪しんでいましたが、打つ手がなく開戦に入りました。

その外は開戦して裏切られてから東軍であったことを知りました。

関ヶ原も戦いはこのような西軍の隠れた内部事情がある中で行われました。

（2）三成の敗戦の理由

関ヶ原の戦いで三成の西軍の直接の敗因を整理します。

- 一に、徳川単独軍の勢力が他の大名に比し圧倒的に大きいこと。
- 二に、東軍の結成が速やかで結束が固いこと。
- 三に、東軍の西上が三成の思ったより速く美濃を制覇できなかつたこと。
伊勢方面に主力がはりついていたことによる。
- 四に、家康の出陣がないと思ったこと。
- 五に、総大将の毛利輝元の出陣（3万）がなかつたこと
- 六に、西軍の指揮は中規模大名の三成の采配では無理であつたこと。
さらに三成に大軍を動かす采配経験がなく、武将としては優れているとは言えない。
- 七に、上記結果として関ヶ原で西軍から小早川秀秋外多くの諸将の裏切りが出たこと。

関ヶ原の戦いは、原因は西軍は味方の裏切りによって負けたと言われますが、それはその通りですが、三成も、輝元も、西軍諸将は家康の出陣はないと踏んでいたところに問題があり、裏切りは家康の出陣が大きいと筆者は考えます。

8月10日付の三成から佐竹義宣（中立）への出状の中に「万が一にも、もし家康がうろたえて、上方に向かうことがあつたならば」と記述し、家康の西上がほとんどないことを前提に蜂起しています。

三成の反徳川、西軍結成、蜂起に輝元が安国寺惠瓊にそそのかされて立ち上がってしまったのが、関ヶ原の戦いになつてしまったのです。

家康は、反三成の豊臣諸将を味方につけており、三成の西軍結成蜂起は政権奪取の最大チャンスととらえたでしょう。

上杉征伐で大坂を留守にしたのは三成の蜂起をおびき出す罠と言う人もいます。

しかし家康も関ヶ原では賭けをしていると思います。一つは息子秀忠軍3, 5万人が真田昌幸の上田城攻略が出来ず、関ヶ原の戦いに間に合わないままでの開戦です。更に小早川秀秋や吉川広家が約束通り戦場で味方に付くかどうか保証はありません。人質は取つていたとは思われますが。

毛利元就が大坂城から出陣しないことは確認していたでしょう。出陣させなかつた吉川広家が味方につくとの確証を得ていたかもしれません。

秀忠軍が到着していませんので、両軍ほぼ同数です。丘陵の高めに陣をしく西軍が地形的には有利です。

裏切りがなければ完勝と言えなかったかもしれません。あるいは引き分け、敗退があったかもしれませんでした。

とにかくにも家康の東軍は完勝、三成の西軍は完敗です。

(3) 三成の最期、家康の戦いの位置づけと野望達成

三成の佐和山城（彦根の東側の山）も落ち、父親の正継と兄の正澄も自刃します。

この親子、兄弟は最後まで秀吉の優等生三成との信頼、結束を貫きました。親も兄も三成と同じく教養人として知られています。

三成は逃げましたが、間もなく関ヶ原の西側の伊吹山で捕縛されました。小西行長と安国寺恵瓊も捕縛されました。3人は斬首です。三成41歳です。

長束正家は自領の近江国甲賀郡の水口城で自刃しました。

この4人の首を京都の三条橋の一角にさらされました。

因みに、総大将の毛利輝元が吉川広家の嘆願があり領地縮小だけ、副大将宇喜多秀家は領地没収八丈島へ流罪、その他の西軍に味方した大名も領地没収までで、斬首、切腹等の極刑はありません。

家康のこの戦いの公的な位置づけです。

三成と上記3人が家康に戦いを挑んだ私的闘争の首謀者と言う位置づけにしました。その外は共犯者との位置づけです。

豊臣秀頼と家康の戦いではない。

天下分け目の戦いではないとの位置づけです。

戦後家康は豊臣政権の大老としてふるまいました。

しかし3年後の慶長8年（1603）征夷大將軍となり、徳川政権を樹立します。

政権は豊臣家から徳川家に移り、最終的には秀吉の子秀頼は大坂の陣で自刃し豊臣家は絶滅しました（1615年）。

秀吉子飼いの加藤清正も福島正則も手の施しようもありませんでした。

江戸時代に両家はともに衰退します。

石田三成はこれを恐れて立ち上がったのです。

しかし巨大勢力で辣腕政治家の家康には対抗できませんでした。

他の大名の多くはこの成り行きを想定していたはずですが。

秀吉だって織田政権を乗っ取ったのですから。不思議ではありません。

おわりに＝三成の出自

最後になりましたが三成の出自です。

幼名は佐吉、永禄3年（1560）生まれ、没年は慶長5年（1600）、
41歳

近江国（滋賀県）坂田郡石田村（浅井氏旧領）出身、

父親の正継は石田村の郷士で村長のような立場の人、

佐吉（三成）は勉強のため、近郷の真言寺に預けられます。

寺を訪れた秀吉に認められ小姓として仕えます。15歳ごろのことです。

その後その天稟をかわれ、近習、奏者番（大名との取次）、軍奉行（食糧、弾薬等の調達・運搬）、軍監（秀吉の目付）となり秀吉執政の奉行（事務官僚）となります。

秀吉が病床にある頃に五奉行の一人に選ばれました。その頃には近江佐和山19万石の城主でした。

父親も兄の正澄も秀吉の家来になりました。

三成は家康を滅ぼさないと豊臣家の存続はないと思い、家康に戦いを挑みました。

秀吉に殉じたと言う人もあれ、我慢をして家康に頭を下げ、辞を低くして生きて秀頼を守るべきだったのではないかという人もあります。

筆者は三成は秀頼を守る事よりも恩義ある秀吉に殉じた人であったと思います。

ご存知の通り、豊臣家は家康によって滅亡しました。

以上

2021年7月12日

梅 一声

- 本稿 石田三成 渡邊世祐 1907年
- 古今武家盛衰記「石田治部少輔三成」 黒川真道 1914 国史研究会
- 石田三成 今井林太郎 1961年 吉川弘文館
- 石田三成 桑田忠親 1982年 講談社
- 石田三成 歴史群像シリーズ55 1998年 学習研究社
- 武将列伝下 石田三成 海音寺潮五郎全集17巻 1970年 朝日新聞社
- 大関ヶ原展(図録) 編集東京都江戸東京博物館等 2015年 テレビ朝日
- 関ヶ原合戦図屏風 週刊絵で見る日本史4 2010年11月15日号
集英社

